

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
 昭和六十年一月十五日 発行 (毎月一回十五日発行)

(通第四二一六号)

慈光

第三十七卷 第一号

次

慈愛と真実……………	近角常観……………	(1)
ただ念仏して―たのもしさ……………	池山榮吉……………	(6)
「ありそなこと」について……………	川畑愛義……………	(10)
慈光日誌抄……………	西元宗助……………	(11)
無相師の御手紙……………	岩崎成章……………	(14)
無相師の臨末法語……………	土井紀明……………	(17)
共是凡夫耳……………	山本晋道……………	(18)
他力をたのみ奉る悪人……………	花田正夫……………	(20)

目

慈愛と真実

——永劫の親——

近角常観

釈尊が一代の教化を終られて、パッタヤ河の畔、沙羅雙樹の間においで、病を現じて、涅槃に入られんとする時、弟子は泣き哀みて曰く。如来は智慧の燈火なり、苦海の船筏なり、願くば我等のために永く此世に止りたまえと。その時仏の説かれし最後の説法が「涅槃経」である、これは仏の遺言である。その経の要点は次の四句の偈文に結集するのである。

諸行は無常なり、是れ生滅の法なり。

生滅滅し已れば、寂滅を樂となす。

弘法大師が、これを和訳されたのが「いろは歌」である。「色は匂へど散りぬるを、わが世誰れぞ常ならむ」。仏は一代の間かねて、一切のあらゆるものは無常である。生まれたるもの死し、盛なるもの衰え、會えるものは離れねばならぬということの説き聞かしたではないか。今いよいよその時節到来して別れねばならぬのである。然し汝等は永劫別れねばならぬと思うことなかれ。「有為の奥山今日越

彌陀の願船に乗じて、生死の苦海を渡り、報土のきしにつきぬるものなれば、煩惱の黒雲はやく晴れ、法性の覚月すみやかにあらはれて、尽十方無碍の光明に一味にして、一切の衆生を利益せんときにこそさとりにてはそうらへ。

とあるが、実に涅槃の妙境界である。かく考えきたれば一面には哀別離苦の血の涙は、如来常住の慈悲の涙でとろかざるのである。

全体仏数には消極と積極の両面のあることを忘れてはならぬ。まず他の教は人生を樂觀せんとする積極一面を説いて、その消極の方面を顧みぬ。故に人生で消極の事件に遭遇するとき破壊されることが多い。仏教では人生そのものを以て、常住・安樂・主我・清浄と考へるのは、凡夫の四顛倒と名づけて、人生の真相を全く反対に見誤りたるものなりと云うのである。「色は匂へど散りぬるを、わが世たれぞ常ならむ」というは、その消極の一面を喝破されたのである。しかしこの意味を理解することは容易であるが、これを体験するのになければ何の効もない。釈尊が寂を示されたのは仏弟子に対してこの消極方面の教訓を身を以て説かれたのである。今三谷氏が、如何なる孝養を尽くし、如何なる犠牲を払うても、ひとたび母堂に本復して貰いたいと心血を注がれしも、人力を以ては遂に如何ともすべからず、

えて、浅き夢見じ、酔ひもせず」我は今この変化多き世界の奥山を越えて、迷いの浅き夢より覚め、又煩惱の酔を醒まして、真如寂靜の覺の都に立ち帰るのである。そこは永久常樂の境界にして、汝等を照らし覽るのである。汝等を護り救うのである。

如来の色身は滅すといえども法身は滅せず。如来は常住にして変易あることなし。

というが「涅槃経」の真髓である。色身とは有形の身体のことである。法身というは永久無形の仏の証の境界である。その如来は常住にして更に變ることなく、千古汝等の親として大慈大悲を以て一切衆生を攝取せずば止まぬといふ釈尊最後の御遺言である。

このたび三谷氏が現世の親を失われたは如何にも哀悼極まりなきことなれど、この涅槃経の説法の如く、母堂もこの世を去り、彼世において成仏して、永劫の親となりて我等を照攝攝護せらるることは、一点疑いなきことである。

ならず、終に母堂が示寂されたるは、一生の間、同氏を撫育成功せしめるために粉骨碎身せられたる上、最後に亦身を以て諸行無常の大教訓を与えられたのである。恐らくは同氏として何物を以てするもかくの如き大消極の説法を感じることはできぬであらう。

しかし仏教は決して消極一面の教に非ず、その消極を説くのは絶対の大積極を説くためであることを忘れてはならぬ。ややもすれば古今往々その消極の一面のみを見て、仏教は厭世悲觀の数なりと誤解するものが多い。仏教の歴史に小乘・大乘ということがある。全体仏が小乗を説かるるはずはないのであるが、いたずらに仏の言説に拘泥し、もしくは独自の小覚に囚われて、遂に消極の一面のみに墮したのが小乗である。その弊を打破して絶対の大積極を顕現し來たりたのが大乘である。

一幅の涅槃像に示さるる如く、如来の入寂は一切衆生をして悲泣号哭せしめ、灯火の滅するが如く無明の世界たらしめたのである。然し如来は「有為の奥山今日越えて、浅き夢見じ酔ひもせず」と、真如法性の境界に帰り給いて、無碍の大光明を放ちて、却って穢土に残れる我等の永久の御親となつて下されたのである。ここに於て、涅槃の四徳として常樂我淨の世界が開け來たるのである。是が即ち法性常住の如来である。無有變易の如来である。無漏清淨の

世界である。法性常樂の世界である。今三谷氏の母堂も、身自らこの極樂世界に往生して、永劫の御親たる如来大悲の願心を我等有縁のものに知らしめ給うことを感謝せねばならぬ。

如来の聖行

如来が我等のために法を求めて苦行を修し給いたることにつきて、前記四句の偈に關して雪山の菩薩の説話が涅槃經に説かれている。これは非常に味の深い教訓なれば、その大略を述べたいと思う。

過去世に於て仏が菩薩として道を求められし時、人生の常樂の法を悦びて、未だ大乘の教を聞かなかつた。その時ヒマラヤ山即ち雪山に住せられていた。その山は清淨にして、花咲き、泉流れ、鳥歌い、果実熟し、人生の快樂一つも欠くることもなかつた。しかれども修行者は少しも法を知らず、大乘の名も知らなかつた。それ故如何に難行苦行をなしても真実の道を求めんとて、このために自己の身を捨つるも慳しからず、衆生を利益するためには如何なる財産も捧げ、あらゆるものを犠牲にしても無上菩提を求めんと誓われた。帝釈天が遙かにその様を見ておもえらく、実に菩提心は動転し易いもので、水中の月の水動けば影また動き、絵師の像を画くに、忽ち壞れ易きが如きである。彼の求道者は果してその志を貫徹するであろうか、これを試

て居らぬ故である。是非とも他の半偈を聞きたいものである。そこで羅刹に問うて曰く、汝は何れの処にてかくの如き半如意珠を得しや。今汝の説きたる半偈は、過去・未來・現在の説き給う正道である。こいねがわくば、我が爲に後の半偈を説きたまへと。羅刹答えて曰く、我多日飢渴に苦しめられて、心乱れてたわごとしたるばかりである。とても説くことは出来ぬと。菩薩曰く、然らば何なりとも汝の欲する食を与うべしと。羅刹曰く、我食うところは人の煖肉なり、我飲むところは人の熱血なりと。修行者が果して身を捨てて道を求むる志あるや否やを試練するのであった。実にこれ人生問題において無常生滅の羅刹が現われて、我等を食わんと迫り来たるのである。諸行無常の教訓は、親に別れ、子を失いたるが如き實際問題に遭遇していよ／＼我身を捨つるに非ずんば、眞の道は得べからざるを諷示したのである。

修行者はさすがに真劍である。即刻答えて曰く、そは易きことである、汝、わがために後の半偈を説かば、この身を捧げて供養すべしと。羅刹答えて曰く、誰か汝の言を信ずべき、何となれば、汝が道を求むるはそも／＼何のためぞ。定めて道を聞きて大いに爲すあらんと欲するためであらう。もし道を聞きて直に死したらば、何の益もないであらうと。実に味い深い試練である。世の人々働かんがため

みよふと思つた。金を試すにはこれを焼き、これを打ち、これを磨いて、はじめて眞正なることが知れる。彼の苦行もこの如き試練を経ねばならぬと。そこで自ら身を変じて怖ろしき羅刹の形を現わし、雪山に至りて遠からざる所に立ちて、清雅なる声を以て過去仏の説かれた半偈を宣べた。

諸行無常、是生滅法。

かくて菩薩の前に姿を現わした。その形貌すこぶる怖しきものであつた。菩薩は初めて二句の法を聞いて、如何にも歡喜に堪えなかつた。旅人が險路に伴侶を失うて再び遇えるが如く、危篤の病人が回生の妙薬を得たるが如く、難船の人が救助に遇うた如く、幽囚の人が牢獄を出するが如くであつた。何となれば、今までは雪山の榮華を愛し、人生の快樂をのみ悦びたるに「色は匂へど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ」という聖訓を聞いて、人生無常の真理を悟りたからである。そこで何人がかくの如き法を説きたるかを怪しみて、起ちて四方を見廻わすと、誰も居らぬ、ただ怖ろしき羅刹を見るばかりである。そこで菩薩は、誰がかくの如き解脱の門を開きて、生死の睡をさますべき大法雷を震いたるや。実に我この半偈をききて、我が心を啓悟せしむること半月のごとく、蓮華の漸く開くが如くである。何となれば、前にも述べたのごとく、人生は無常であるという消極の半面のみを説きて、余の半面は未だ説かれ

に信仰を求め、人格を高めんがために信仰を求め、成功せんがために信仰を求める人ならば、この羅刹の難問を通過することはできまい。菩薩即答して曰く、汝すでに我に教えしに非ずや、「色は匂へど散りぬるを、我が世たれぞ常ならむ」と。我今その散り行く無常の身を捨て、永劫不變の金剛身を得んとするのである。瓦器を施して七宝の器を得るがごとくである。朝に道を聞けば夕に死すとも可なり、我あに法の爲に穢身を捨つるをおしまんやと。答案は明瞭である。羅刹曰く、可し、諦かに聴け、汝の爲に余の半偈を説べんと。曰く、

生滅滅已、寂滅爲樂。

「有爲の奥山今日越えて、浅き夢見じ酔ひもせず」積極的な大乘涅槃の眞如の都は現われ来たりたのである。永劫変らざる如来常住の境界は我等を照鑿したまうのである。はじめて無量壽、無量光の如来は十方微塵世界を尽くして、無碍の光明を放ち給うのである。菩薩は大満足をしたのである。眞に無明の夢が覚めたのである。煩惱の酔が醒めたのである。そこで菩薩は約束の如く身を施さんとするのである。しかし後の衆生のためにこれを書き遣さんとて、石や、壁や、樹や、道や、いかなるところにもこの四句の偈を書き表わしたとある。嗚呼わが国にはこれを「いろは歌」に書き表わして、国民文字の習いはじめとせられたるは、弘

法大師の用意深き驚くばかりである。そこで樹にのぼりて、身を投じて羅刹に与えんとした時に、樹の神これを見て何事を為すぞと咎めた。菩薩曰く、我半偈のために身を捨てんとす、後の衆生この偈を聞く者、ただ徒らに文句をききたるばかりにては、真意を知るべからず、我一切衆生のために身を捨てて求めたのである。世の慳惜の人、少施を以て貢高の心を起すものあらば、我一偈のために身を捨てて草木の如くせるを見せしめよと。即ち身を放つて樹下に投じたのである。菩薩いまだ地に達せざる時、羅刹即ち帝釈天の身を現じ、空中において菩薩を接取して平地に安置し、菩薩の足下に頂礼して曰く「善哉、善哉、真にこれ菩薩なり。衆生を利益せんがために身を捨て、無明黒闇の中に大法炬を燃し給う。願くば我菩薩を試みし罪をゆるし給え」と。忽然として見えなくなつたとある。

実に意味深長の説話である。身を捨てて、しかも活きたのである。人生は真に身を捨てて、はじめて大いに酬いられるのである。酬いられんとして働くものは身を捨てて能わざる人である。死を堵して呐喊したる人は、戦い勝ちて凱旋するの光栄が与えられるのである。「心だに誠の道にかないなば、祈らずとも神や護らん」人生生活の要訣は、この説話に尽きてあらん。特に仏教の真髓は、この一偈に蘊蓄せられて、甚深微妙の極りである。「懸崖に手を放

ちて、絶後に蘇へる」というもこれである。「たとい法然聖人にすかされたてまつりて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」とあるもこれである。如来は墮つる我等を受け留め給うのである。地獄必定の我等を救済したまう攝取不捨の誓願である。これが如来が菩薩たりし時、我等がために聖行を修し給ひし過去世の因縁の随一である。

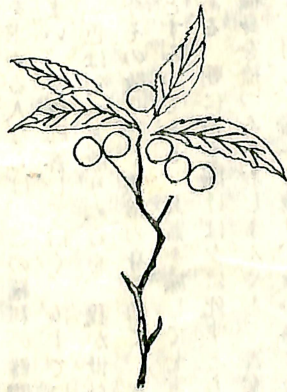
人がもし真実なものを見出すなら、

われとして為す何事もない

唯、真実から流れ出る光の通路となつて

音楽をかなでるだけである。

西 哲のことば



ただ念仏して——たのもしと(五)

念仏は自動する。念仏は自省を促し、自省は念仏の意義を深める。一方、念仏の意義が、いよ／＼深く信じられるに従つて、他方、まず／＼深く自己の何んたるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に働きかけて、相互に促進を競い合う。が、その実樞の両面とも謂つべきもの、結局帰命の一念に抱擁する傾向に動くのである。落着くところへ落着かせる、からくりの妙、ただただ不思議と呆れるのほかない。

他方はひとりばたらきである、と同時に自発的である。他の勧誘や要請を待つて動くものでない。名けて他力の自動作用と云つてもよい。その自動作用一般は、縦に古往今来を貫ぬき、横に四方八面を包んで、深広にして涯底なく、窺知臆測を許さないのであるが、その作用が、私達に直接して現われているのが、否、私達に直接しようがために、ことさらに現われたのが念仏である。であるから、念仏は

自動する。

念仏の自動作用の顕著な一つの方面は、念仏は自省を促すという点である。念仏は鏡である。浄玻璃の鏡である。見る人の真相を映し出さずにはおかない。念仏の鏡以外の鏡、例えば世間道徳の鏡では、見る人みずから、目を掩わずにはいられない醜さも、怖めず臆せず、見つめることを許すのは、念仏の鏡の特徴である。かねてしろしめしての念仏に對つては、いささかの遠慮会釈なく、自分を見下げ果てることが出来る。私はこれを念仏の洗悟作用と命名する。洗悟とは、どうだね、お前の本来の姿がわかるかねと、さとするという意味である。

今一つの方面は、自省は念仏の意義を深める。という点である。富士山は何万尺あると聞いただけではその高さを、はつきり想像することも六つかしいが、近く寄つて見上げれば、一目で測り知ることが出来る。が海——海の方が山

池 山 榮 吉

の高さに比して、より深いところがあるそうだが——海の深いところは、目で見ただけでは、とんとわからない。しかしこの海のこのところは、富士山だけの深さがあると聞けば、富士山の高さを見た目で、その海の深さを想定するのは難くない。わが身の煩惱の、富士山ほどの高さに呆れば、それを包容して余りある、本願海念仏の深さにも呆れずには居られまい。して見ると、煩惱の高さは念仏の深さの秤である。これは念仏の自願作用とも謂うべきもの。

この洗悟、自願の両作用は、一つ鉄索の両端に繋がれたケーブルの車である。一方が高まれば高まるほど、それと正比例して、他の一方が深まる。念仏への信知が、高まりもしくは深まるにつれて、自己の真相への観察が、深まりもしくは高まってくる。

われならぬきよらのわれのわれにありて けがれのわれをわれにしらしむ

念仏は、念仏するものを、結局おちつくところへおちつかせる。念仏の自働性に、鬼に金棒、行軍にラッパの、強化促進の役割を演ずるものがある。さきに述べた念仏の反復性がすなわちそれである。読書百遍意おのずから通ず、念仏だつて稱え稱えてる間に、点滴ほど堅い巖はない道理。本願の念仏は、莫大小で出来ている。

念仏は招く、「一心正念直来」と。念仏の心意気がよくこの言葉に現われている。今これを放浪の旅を続ける一人子の帰りを故郷に待ちわびる、母の心に引合わすことを許されるならば、直来をスグキテオクレと訓じ、一心正念に、オネガヒダカラと仮名を振っても、そう見当は外れてはいまいと思う。オネガヒダカラ スグキテオクレヨ、この哀々惻々の哀情が、相手の心に滲透し、感銘した極促が、やがてそのまま内から滲み出る切々の帰心ともなり、「念仏申さんとおもいたつ心」ともなるのであって、この心境の変化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける氣遣いのないつよい固い結びを仕上げるのである。

北原白秋作、城ヶ島の雨と題する詩の一節に、こういうのがある。

船は艦でやる 艦は歌でやる 歌は船頭さんの心意氣 船を動かすには、その推進の衝にあたる艦がなくてはな

で、なんぼ耳の遠い人にも、いつか本當の意味のきこえない苦はあるまい。そこで私は、重ねて各位に、念仏の常用をおすすめせずには居られません。

習うより慣れろである。ものは、いじくつてるまに、そのものこのころ、本質、本當の取扱いがわかつてくる。生花、茶の湯などの骨も結局はここにあるのだからと思う。碁盤や碁石でもたびたび扱っているうちに、石は蛤、盤は櫃にかぎるといふ動かぬ味がわかつてくる。今私の家にワツハマンと呼ぶ犬がいるが、此奴頭に私の手の平をのせて貰うのが大好きで、私の側にすり寄っては、鼻面で私の手をこついて、意のあるところをほのめかす。で、望み通りにしてやると、夢みるように目を細くして三味に入る。これも矢張り日頃愛撫されるさまの仕方のうち、これが一番いいと体験した結果で、要するに経験の累積がそうさせるのである。私達は経験の結果、好き不喜欢、よしあしを判別し、撰択する。そしてその撰択の結果が、また経験の累積の揚句、新なる撰択と変つて行く。念仏も亦然りである。何だかしっくりしないと思いながらも、となえくしている間に、念仏の自働性、反復性等が契機して、自覚的、無自覚的に、工合よく推移することはありうる。

念仏はメリヤスのシャツみたいなものだ。メリヤスとはらない。艦は船をやる力である。しかしその力の十分の発揚を期するには、船歌の励ましに待たなくてはならない。何故ならば、その歌には、船頭の潑刺たる意気が籠っているのだから。

まあ大休こんな風な意味だろうが、その歌を念仏としたらどんなものかと、考一考したら、私はこの文句をかりて、他力の機構を象徴することが出来るように思う。

先ず船を本願とみる。弘誓の船、大悲の願船である。本願の船を進める推進機、艦はすなわち行である。行は願を實現せしめる因であり、廻向であり。そしてその因に宛てたのが、万行諸善の自力廻向を嫌って、特に択んだ往相廻向の不行である。不行とは、無碍光如来の名を稱するなりだから艦をやる歌は念仏である。そしてその念仏は、すなわち船頭さん、如来の心意氣、即ち、罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願心を吹き込んだものである。

歌は念仏、船頭さんは如来、船は本願、艦は廻向。大悲の念仏丸の仕掛、一目瞭然である。

彌陀観音大勢至 大願の船に乗じてぞ

生死の海にうかみつ 有情をよばふて乗せ結ぶ

大悲の願船の水夫楫取が、茫々たる生死海上に乗り出し

定善報
魔郷には停るべからず
必死覚悟
20

信(五)を呼ばう声、それこそ西岸上からの喚び声、一心正念直来である。その声がさらに東岸、二河の前に立ち竦んだ人の心魂に徹つて、ほどばしる反響の声となつたのが、帰命尽十方無碍光如来であり、南無不可思議光如来であり、南無阿彌陀仏である。

先年病臥中、不意に思いついたことであるが、一心正念直来とは、念仏の意義の和述として、これにこしたものはない、極めて適切な措辞であるまいか

「直来」を本願招喚の勅命として、直に來れと読むのは当然であり、いかにも父としての尊嚴さを思わせる響がある。が、やさしい／＼慈愛そのものの母親が、我が子の歸りを待ちわびて、あしずりする思いを酌んで、スグキテオクレヨと読むのも、そうした場合にふさわしいという点から許されようと思う。「一心正念」も、ただただそのままとでも、訓じて置けば無難だろうが、一步奥に踏みこんでやるせない如来の思召に鑑みて、オネガヒダカラと仮名を振つても、正鵠失したものは言われまい。

私の件が長く南米に行つて居て、去年一時帰国した際、何月何日帰洛仕候と、友人知己に音信したが、考えてみればチト変である。件が南米に行つた頃は、私は京都に住ん

「ありそなこと」について

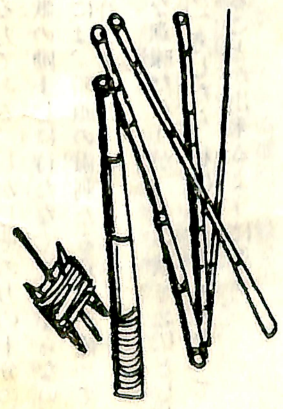
川 畑 愛 義

私が大学を卒えてからそう長く経たない頃、池山先生から聞いた「ありそなこと」[E's ist sehr Moglich]というドイツの参議ストリークの物語は当時それほど感銘深いものとは意識しなかつたが、老令に達した今日でもなおかなり鮮明に当時のことを思い起すことがあるのは不思議なことです。このストリークの云つていふことといふのは、世の中の人々がそんなことなんか到底ありそうもないと考えることでも、じつはありそうなこと、起りうることでもあるのだというのです。すなわち、It is very Possible. なのだという人生観から出た驚句なのです。

彼がこれを貴重な人生訓として唱えるようになったのは、それなりのわけがあるのです。かつて彼は絶対的に信頼し、敬服していた友人にすっかり裏切られ、また全身全霊をもって愛し合ひ、もし結婚できなければ死をもつて対処しようと誓ひ合った恋人にまでまんまと背かれてしまったからでありました。それから人間関係に限らず、社会のこと、いや一切合切、この世のことは絶対的なものは何一つない、光と影の如く、陽イ

ではない。件もまだ京都に住んだことはない。だのに帰洛とはおかしいと矛盾を感じるが、よく考えて見ると、一向さし障りはない。何故ならば、たとえ自分が住んだことはなくても、親の住む所へ行くのだから、即ち帰るのである。私達の浄土へ往生するのも、そうである。まだ見もしらぬ浄土ではあるが、待っている親の家だもの、往くはやはぬ浄土である。オネガヒダカラスグキテオクレヨ、何んたる哀切な叫びである。歸去来、他郷には停るべからず、淨土の如き帰心が子に起るのは、切なる親心が子の心に徹到する結果であり、感入の反映である。その刹那、

久遠このかた子ゆえの廻向
わたし一人を片思い
子の立場からは、瞞のそれともいい得ない、見も知りもしなかつた親と子の、初の名乗りがすむのである。



オオンと陰イオンの如く、さらにまた恰も一枚の紙の如く、裏のない紙も表のない如くで、いふなれば信と不信と、実と不実と、また虚と真とが一体となつていふことを理解したからでした。

たしかに心を冷靜にして考察してみれば、それに違いないのだが、私達はともすれば相対的なものを絶対化して信じたり、立体を一面的にとらえようとしたりします。しかもその浅はかさや私自身反省することを忘れがちです。ここを著者の池山先生は「ありそなこと」を「なむあみだぶつ」に置きかえてみてはどうかと、読者に謎をかけていられます。云うまでもなく、何だつてありうるということとは、そのまま仏教の根本諦念であつて諸行無常に通ずるし、また一切是空にも帰納されるように思ひます。

これはまた親鸞聖人の「よろづのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなし」のお言葉にも符合するように思われま

しかも親鸞聖人はこのような不実、虚偽はどこから来るかといえ、各自が「煩惱具足の凡夫であり、社会全体の火宅無常の世界」だからと説かれています。

そしてこのようすべてが信頼できない事象を、かねてしろしめして、その煩惱具足の凡夫を目当て(ターゲット)として南無阿彌陀仏が誕生し、実存しているのだと教えられているのではないでしようか。

慈光日誌抄

—遠く宿縁を慶ぶ—

西元宗助

新年おめでとうございます。本年もおよろしく願います。しかし、ことしのお正月は、無相翁の一周忌でもありますので、愛惜の念しきりでございます。翁は、いや無相さんは、まことに人なっこい方でありましたが、み仏のごとくにわれらの前に現われ給い、南無阿彌陀仏となつてあの世に還つていかれました。

無相さんをお偲びするすかにも「念仏詩抄」から、一二篇をいただく。

道がある

道がある

道がある

たった一つの

道がある

花のごとくに
草のごとくに

旧年末のことになります。広島〇の法正寺の報恩講にお詣りする。これでたしか、十年となりましょうか。十年近くもつづくと、もうみんな顔なじみ。毎年聞いてくださるとなると、ことしも亦同じお話しというわけにはまいらぬ。そのことも、つくづく有難いと思う。というのは、この法正さんで毎年二日間お話しさせていただくためにも、わたしは一年間、日に日に新たに、如来の恩召しを、わが身に聴聞させていただかねばならぬのですから。

その法正さんの報恩講に、郊外の吉田町・元浄寺の前住職・蓮沼鈴宿老夫人及びご養子夫妻がお参りくださる。蓮沼さんとの縁も、まことに不思議である。

もう七、八年になるうか、『大乘』誌の新年号に左のありがたい句を紹介させていただいたことがある。

救はれぬ身に泌みわたる名名の聲

わたしが、この句を知って、からだ全体がしびれるほどに感動したのは、昭和二十四年秋にシベリアの俘虜生活から帰国直後、奈良の浄教寺のお婆さまから承った時である。なんでも作者は龍大出身のお若い僧侶で、新婚数日に兵隊

極重悪人 唯稱仏

生きる

生きる

生きる

自分を尽して

生きる——

散るときがきたら

散り

枯れるときがきたら

枯れるがよい

生きる

生きる

に召集され、シंगाポールのジョホール渡河作戦で戦死されたというのであるが、その僧侶のことが判然としなのが残念と、拙文の末尾に附記しておいた、せめてお名前だけでも知りたくて。

すると、さっそく速達便をくださったのが前記の蓮沼夫人である。そのお便りによると、句の作者は山田真龍という方。もとく、元浄寺の門徒で、寺の日曜学校、仏教青年会にて育ち、当時住職であった今は亡き夫君の蓮沼真澄師が、その聞法の念の真摯なを見込んで龍大に進ませ、僧侶になっていただいたとのこと、しかし「大乘」誌にお書きくださったように、惜しくも戦死。文才もおありで、「救はれぬ身に」の句のほかにも、沢山の詩文を残している。

右のような御縁で、その後、元浄寺さまにお招きいただいたり、また拙宅にお出でくださったりしているうちに、蓮沼さんは一人息子を原爆でなくされたこと、それを歎き悲しんだ御主人真澄師（号・露星）——その後、まもなく病死——の手記が残存してあり、それらをまとめた『蓮沼真澄遺稿集』（プリント版）が、白井成允先生の序文つきで刊行されていることを知る。そしてそれを拝読して、真澄師の深い信仰と御教化に驚く。

ところで、その蓮沼老夫人、前記のように法正寺の報恩

講に、わぎ／＼お参りくださって、ご挨拶もそこそこ、老いの目を輝かせながら、「まあ、なんと不思議なご縁でございましょう、今から五十数年前のことでございます。前もって電報くださってしまして、私どもの山寺にお訪ねくださいましたのは、京都の東山女専—いまの京都女子大学—の学生さん。小林あや子さんとおっしゃる背の高い美しいお嬢さまでした。ご信心のことで、はるばるとお出でくださった、そのひたむきなお心持ちに深く心うたれたこととでございますが、それからしばらくして、お礼状をかねて、このたび結婚することになりましたと、喜びのおたよりをいただきました。そしてそれに、花田と仰せのご信心の篤い方と、書き添えてございましたが、そのお方が、まあ、花田正夫先生でおありとは、最近までつゆ存じませず、まことに失礼いたしました。ほんとうに不思議なありがたいご縁でございます」と仰せになった。私も人生のあまりにも不思議な重々の御縁—因縁に、ただただ感じ入ったこととでございます。

新年にあたり、花田先生ご夫妻のご健康を讀者の方々と共に案じ、念じながら、この稿を終らせていただく。最後に、源佐同行の好きな、「ひとりごと」を一つ。

無相師の御手紙

無相師には過ぐる昭和五十六年八月末日に長期に亘る病院生活に、老人ホーム園長白藤昭武さんの御配慮を謝しつつ御便りを頂いたのですが、その中に、去る八月四日に二度目の入院をされ、八月二十日に鯖江の国立病院でガン死された老人ホームの田辺指導員のお母さんの「みつ子」さんの日記を読ませて貰いましたが、病氣やその他についてグチャや、悪口は一つもなく、書いていることは、通じて感謝ばかりなので、今の時代にこんな人も居るものかと、驚いていることです。

それはたしか、昨年八月頃かと思いますが、田辺文夫指導員が「私の母が信仰について、無相さんに聞きたいことがあると云っている」とのこと、早速同君の家でお母さんに会って法話しました。お母さんの話によると、もう十年も前から福井市にある真宗十派ではない「弘願真宗」の本山に参っているが、①家のことは放っておいてもオマイリせよ、②教義を次ぎ／＼としっかり勉強せよ、③そのあげ

偽になつたら
もうええだ
なかなか 偽に
なれんどのう

(ナンマンダ ナンマンダ)



岩崎成章

くに得度せよ、といったことを熱心に勧めるので、主人は建築の雑役の仕事に出、ムスコはツトメに出るので、タンボ仕事や家のことは一切一人でやらねばならぬので、「弘願真宗」で熱心に勧められるようには出来ぬので悩んでいたのも、そのアヤマリを解りやすく話をしたところ、それは「弘願真宗」をやめますが、これからどうしたらよろしいかと云うので「歎異抄」の本文と、口語訳のヒラガナつきの小冊子を渡して、お寺に詣らなくてよいから家の仕事のお聞かせを頂く積りで、自分で声に出して拝読し、お念仏申しなさい、詮ずるところは「お念仏一つ」であるから、と申し聞かせたところ、私の言葉をマジメに受けとって、それ以来、この八月二十日に亡くなるまで、歎異抄拝読と、ヒトリ静かに「稱名念仏」されるだけで過ごされたようであります。私は七回の法談だけ、小学校出で、ただそれだけで「お念仏一つ」と信心決定し、お念仏を喜び、

「ありがとう／＼」と感謝しつつ往生されたということ、勿論如来様の大慈悲の誓願力あつてのことですが、田辺みつ子さんのようなスナオサは誠にまれなことでありませう。

第一回の手術を明日にひかえて、無相さんとの法談の様子を次の通りに書いてあります。十月五日午後一時頃、文夫が思ひかけず、無相さんを案内して来ました。本当に驚きました。早速南側の明るい面会場でお目にかかりました。私の元氣な顔を見て安心されました。また私も久し振りにお逢いして勿体ないやら、有難いやらで涙が出ました。一心になつてお話を聞きしました。早速法話して下さり、心構え、お念仏のお力など話して下さいました。歎異抄のことを申したら、それが一番よろしいと申され、お念仏しなさいと申されました。母親の乳房が南無阿彌陀仏のお念仏である、ふだんにお念仏をと覚えていればそれでよろしい。病氣に苦しむ時は出ない、出なくてよろしい、そのままで行けよとお言葉です。いつでもとなえよとのことでした。母親の名を呼ぶ氣持一つでよい、むづかしいことは考えなくてよい、勉強しなくてもよい。日露戦争の時、二〇三高地で負傷したルマさんになつて内地に送り返された戦士が、母に一目会いたいと申したが、目も見えず、誰だか解らないが、母親が来られて、乳房を口の中に入れてられた、その時「お母あー」と叫んだという話をされました。

いては、よくわかつているようですが、さらに苦しくなつたら、お念仏も、お慈悲も、如来様も、仏法も、ありがたいても、皆わすれて、凡夫は凡夫なりに、苦しい／＼痛い痛いだけで、死なせてもらえば、われ／＼凡夫の「役目」はすむので、稱えたり、ありがたがたり、仏法のことを思つたり、ぜん／＼しなくてよいから、オタガイ苦しい／＼痛い／＼だけで死なせてもらいましよう。宿業でたとえボケても狂うても、違えたまわぬミダの約束とのカバタの和上のお歌をひいて、そういうものの「生死出離」後生の「大事」をマル／＼引き受けて下さるのが如来さまの「お役目」といったことについてくわしく、感ずるまま、私のいたたくまを書き御返事しました。私は田辺みつ子さんに限つては安心させていたいであります。

生きるにしても、死ぬるにしても、生き死にの道はただただ、ナムアミダブツの外なく、それも、信じたり、稱えたり、するヒマなき無常のこの世なれば、仰せきり、ナムアミダブツの仰せきり「汝を救う」のナムアミダブツの仰せが、かかつたまんまがお助けでありましよう。稱えるところも、信ずるところも、ただ仰せきり、ただただ仰せきりでごいませう。帰命とは本願招喚の勅命なり。ナム、ナム、ナム、ナムと。

師の御感懐まことに申すことばもありません。其の後の

それでお念仏はその乳房と同じだから、親と思つてお念仏しなさいと申されました。私の元氣な姿を見て安心されました。私も心の中が一段と明るくなり、明日の手術を待ちます」とありました。

今回の再入院の時は、家を出る時、もうお別れがわからない身ゆえ、お仏壇におまいりして、御仏様と御先祖様にお別れました。私はしあわせものですよ。

その後壇那寺の御住職の話に、夫婦揃つて最後のいとま乞いに寺に詣られた由。再入院の八月十日にムスコさんに托したお手紙には「歎異抄」について、もう他の本も読まず、毎日繰り返してよませていただいでよろこんでいきます。本当に私にぴったりわかるお言葉で、何よりうれいす。このまんま此の姿でまいります（無相曰く、かの土へと云うことでしよう）おかげ様で心も明るくなり、何の不安心もなくなつております。これからお念仏一つでまいります。苦しくなつたらもう稱えられませぬね、どうもありがとうございました、私はしあわせ者でございます。この御本は私の宝物です以下略、

私としては、お念仏一つということは、お念仏を稱えたら助けるが、稱えねば助けんと言ふようなことでないと言ふこと、苦しくなつたらもう稱えられませぬね」に

お便りには、田辺みつ子さんは八月二十日に亡くなられたことですが、その前日にムスコの文夫君に「もう何も云うこともなく、思ふこともなく、寝ていても、おねんぶつはとなえられます。おむかえの喜びのおねんぶつとして往生させてもらいます」と書き、メモを渡されました由、病中最後まで「歎異抄」を毎日拝読し、モノが云えなくとも、お念仏は申され、アリガトウ／＼と感謝して往生された田辺みつ子さん——五十六才——。

死ぬ前にムスコに、無相さんの手紙をうつして棺の中にいれて、歎異抄と手紙はお仏壇にまつて下さいと遺言されたそうです。

御葬式には、左の弔電を打たせてもらいました。

「念仏の、声もろともに、みつ子様、うまれたまいき、弥陀の浄土へ」

「お浄土の、ホトケとなりし、みつ子さま、ワレラ、おがまん、ナムアミダブツと」

「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」

ハヤシ病院にてキムラムソウ

長い弔電というか、祝電というか、うたせてもらいました。オマイリの皆様も、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと合掌念仏して下さいませう。

自分では、信者とも、念仏者とも思っていない、實際上

の念仏者であつたみづきさんの、ウシロ姿は、そのまま、還相の御用をされていることで、ナニカと次ぎ／＼とお引立てをいただいでいることであります、ナム、ナム、ナム、ナム

無相師臨末法語

土井 紀明（収録）

香樹院師曰く、眞信尼よ、よくきけ、よくき、すると何もわからんりに助けてくださることがわけがわかる、と唯お、せのまま、それだけや、二十才からの聞法求道の結果は、お念仏一つ、ただ念仏せよとて特別にあるのでない、如来のおん目にとまり、特別如来のおん目にとまって、念仏衆生、十方衆生と云うはずだ。全部念仏者だ。如来のおん目から見たら一人もかくる処ない。他宗であろうと非念仏者であろうと、なんであらうと如来のおん目にとまった者は全部念仏者だ。いろいろと凡夫の方に何もいらなと思ひ知らされ、くるしいまま、お念仏申される。参らして下さろうが、下さるまいが、それは如来様のおしごとだ、わしの仕事とちがう。

結論は何もいらんや、凡夫なりに信心も安心もないまま、凡夫のまま死んで行けばよい、生きてゆけばよいの。いわゆる妙好人の話や、信者のはなしはそんな真似は一寸

共是凡夫耳

聖徳太子の御言葉

仏教では三毒の煩惱といつて、私共の見苦しい心の動きの中で、ことに貧欲と瞋恚と愚痴とを戒められます。その中でも、私は生来気の短い氣質で、ともすればすぐ立腹して、人を苦しめ、自分も苦しんで参りました。

仏法を聞かせて頂くようになってから、この瞋恚が如何に見苦しいものであるかを教えられました、なか／＼そのくせが直りませぬ。こんな私には聖徳太子の十七憲法の中の次のお言葉はことに身にします。

十に曰く。忿（こころのいかり）を絶ち、瞋（おもてのいかり）をすて、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり、心各々執れることあり。彼れ是むずれば則ち我れは非みず。我れ是むずれば則ち彼れは非みず。我れ必ずしも聖に非ず、彼れ必ずしも愚に非ず、共に是れ凡夫のみ、是みし非みするの理、なんぞ能く定むべき。相共に賢く愚かなること鑽（みみがね）の端無きが如し。是を以て彼人は瞋ると雖も、還つて我が失を恐る。我独得たりと雖も衆に從ひて同じく拳（お

もいらん。自分なりの業報のままに信者がどうしようと、眞宗人であろうとなかろうと、唯普通の人間として生きてゆき、普通の人間として死んで行けばよい、何もいらん、凡夫のまま何もいらん。無仏法、無信仰、少しでも眞宗らしい気持になろうとする、色気や、お寺の行事はホント方便、正味云うたら何も無い。信心の徳益は信心いだいたら特別のことがあるように思うけれど、それはサツカク、信心いだいても、ただだかんでも、全くのしろうとと同じということをはつきりさせてくださる。腹立てたり、疑ったり、はからったり、ふだんと一寸も変らんとはつきりさせて貰う。これが人間であり、これが人生であるとはつきりさせて貰う、そのまま死なして貰える。それが信心の徳や、信者になれんまんま、気休めではない、普通な平凡な人として終ればよい、そこまでわからしてくる人はあらへん。信者になれぬそのまま、なろうとせぬまま、凡夫のまま、ナンマンガブツ、汝一心正念にして直ちに來れの仰せだけ、我が名をとえよの仰せだけ、アリガトウ、アリガトウ。

ナンマンガブツ ナンマンガブツ
ナンマンガブツ ナンマンガブツ

山本晋道

こなへ。

忿とは、心のいかり、瞋とはそれを面に出して顔色をかえることであります。何故そんなに怒るかという、自分が自分の思う様になつてくれないからであります。然しこんな感情の動き方は明らかに我儘であり、傲慢であります。太子は懇ろにこれをさとして下さい。

十人十色

人が自分の思うようになってくれぬ時に、先ず考えねばならぬことは、人は皆夫々違ふ心を持つている。それ故各自その人らしい考え方を持つている。十人十色という。一寸の虫にも五分の魂はある。だから匹夫もその志を奪うことは出来ぬ。だから一人づつ顔色が違ふように、考え方も当然相異なる。だから彼が是とする所に必ずしも我は賛成しかねることがある。ここに意見の衝突が起り、忿瞋の心が起る。然しこの時、先ず反省しなければならぬことは、自分の意見が必ずしも常に正しいとはきめられない。何と

なれば自分は必ずしも聖者ではないから、時には感情で動いたり、利害で左右されることもある。又人間の力に限りがあるから、自分の見方が必ずしも当たっていないかも知れぬ。だから自分では正しい積りで実は判断が間違っていることも多い。

又自分に反対している相手が必ずしも患者とは限らない。それなのに自分を理解し賛成せぬのは皆患者であるなどと思いがつてはならぬ。仏様の鏡の前に立つて振り返れば、彼も我も共に是れ煩惱具足の凡夫で、是非善悪を判断している肝心の「自分」という尺度が、時々あてにならぬことがある。だから凡夫同志が自分だけが正しいとうぬぼれてきめた是非善悪は、決して窮極の權威あるものではない。この点の反省を欠いて、自分だけが正しいと両方が主張し、お前が間違っていると各自が言い争うならば、その議論の滙てしないことは、鑿に端の無いようなもので、いつまでぐる／＼廻つても解決はつかない。

だから相手が驕つた場合でも、それに応じて直ぐ立腹しないで、一歩さがつて、自分も聖者でないから、何処かで相手を辱らせるような過失を犯したのではあるまいかと反省して見ることがある。もし思い当つたら素直に詫びることである。相手が考え違いをして、こちらの氣持が分らずに怒っている時には、自分もこの人のように早合点で立腹

して人を傷つけていることであろうと反省の手がかりにすることである。又周囲の者が分らずやばかりで、自分が独り道理を会得している場合でも、彼等を軽蔑して独断専行しないで、なるだけ皆と歩調を合わせていけば、何時しか事を正しい方向に持つて行くようになる。

信心の智慧

この行き届いたお戒めは、私にとつてことに有難い反省の鏡になって下さいませ。

省みますと私が立腹する時の氣持は、大抵自分が正しいとうぬぼれている時です。或は相手を見下して軽蔑している時であります。傲慢であり、我儘であります。共に是れ凡夫に過ぎぬぞとの太子の御一言は鋭く私の胸を刺します。自分が凡夫であると分れば謙虚な態度が生まれます。相手が凡夫であると理解すればひろく温かい思いやりの心が湧いてきます。ここに万人がへり下つた、和やかな道が開かれます。然るに私共は、常に、共に是れ凡夫のみということとを忘れ勝ちですが、これを照し出して下さるのは、他力廻向の信心の智慧であります。反省しても／＼、何時も其場限りで同じ過ちを繰返す自分であると思ふとき、度々信心の溝をさらえて彌陀の法水を流すより他に道のない私であります。触光柔軟を誓われた事の仰がれるばかりです。

他力をたのみたてまつる悪人

花田正夫

人生問題で最たるものに、生死問題と善悪問題がある。ところが無常問題は縁にふれて深刻に感じることもあるが、また喉元すぎるとケロリと忘れ勝である。というのも自分に都合の悪いことは拒否する強い傾向を持つからである。

ヤスパスの内妻のボ・ポールは、其著「老い」の序文に佛国でも米国でも、老いとか死を語ることは、人間の恥部に触れることで禁句であるが、釈尊は、老病死を問題として、そこから大きな覺りを得られた。私はここに敢えて老いの問題を掲げると言っている。これは独り、佛・米ばかりでなく人間共通の盲点である。そこに釈尊の教もともすれば他人事となつて、自分の問題となりにくいのである。

第二の善悪の問題は、否でも応でも、朝から晩までそれにかかりはてしている。それは有無、是非、智愚、等々無数であるが、それも其時、其場の自分を中心にした判断であるから、不徹底な、身勝手なことに終る。そのことに初めて氣付きはじめたのが、岡山の第六高等学校の入試の時

あつた。先輩が慰問に来て「自分で嚴重に採点をして見て、それから二割を引いた点数が、先年度の入学者の最下点に達していれば、間違いなしに入学している」と教えてくれた。これはまことに厳しい事であつたが、正しい自己批判であつた。そのように自惚の強いことを具体的に氣付かせられた。是非、善悪の問題も、時代と環境を異にすると変るし、若い時と壮年時代、更に老年期となると違つてくる。聖徳太子が「是非の理、なんぞ能く定む可き」と云われ、歎異抄に「聖人の仰には、善悪の二つ総じてもて存知せざるなり云々」とある。こうした世に「何の世、何人」にあてはまる眞実は、仏のみよく知ろし召すところである。

そうであるのに、実際の生活には「我れ是なり彼非なり」を繰り返して、そこに平和は乱れ、斗争が続く。最近核兵器が発達した反面、平和を求める声も熾んで、切実であるが、この時、外に平和を求める前に、内に深く省みること

が大切である。然し自分を知るといふことは非常に困難である。唯一時的、部分的な自分の姿は見つかつても、三世にわたる自分の全体は自分では知ることが出来ぬ。

善導大師の名言、機法二種深信には、「自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」とある。しかもそれは法に照らされて見えて来ることであつた。歎異抄二章に「いづれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかし」と聖人が仰言つたのもそれである。今は駄目でもいつかはよくなれようと、明日に夢をかけて、それをはてしなく追うのである。

又歎異抄三章に「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」とあるのは、仏の本願のまことを聞いて、成程自分は悪人であつたと知らされ、この者をたすけんがためのおまことであつたと頂くままが、正しく浄土に生れさせて頂ける道であると教えられるのである。そこは如来の御はからい一つで、自分のはからいは微塵もないのである。よくならねばいかぬでもなく、悪くてもよいでもない。よくならうとしても、どうにもならぬ身を、たすけんがための本願を仰ぐばかりである。

歎異抄十三章に「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまあらすればこそ他力にては候へ」とあり、全十六章には「悪からんにつけて

鏡をおくと、自分の領域を侵す敵としてはげしく攻撃すると聞いた。仏典をひもとく時、善人の救われるところは他人事とし、悪人の救いのところを自分と思えと法然聖人が注意されているのも御親切な警告である。

源信僧都の歌にも

夜もすがら仏の道を求むれば、わが心にぞたづね入りぬる

とあるし、道元禪師も、「仏法を学ぶといふは自己を知ることとなり云々」と云われている。

「汝自身を知れ」とソクラテスは警告したが、ゲエテは「そのことの大切さは誰も知っているが、誰一人としてそれに従う者はない」と、その至難さを慚愧している。こゝに仏智の鏡の大切さがきびしく省みさせられる。

孔子は「孝は百行の本なり」と掲げているが、孝とは老と子が一体にとけた心である。親心子知らずであるが、知る力もないことをよく理解して絶えず注ぐ親心が、いつしか子にとどく時ひらける心である。そこに百行の本としての智慧の眼が開くのである。仏心のまことも同様に、煩惱具足の身には知る由もないが、如来の飽くまでもお見捨てのない善巧の大悲、釈迦彌陀二尊の慈悲の父母の御恩まことに謝し難いものがある。

もいよく願力を仰ぎまゐらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心も出でくべし。総て往生には賢きおもひを具せずしてただほれくゝと弥陀の御恩の深重なること常におもひ出しまゐらすべし。しかれば念仏も申され候。これ自然なり、わがはからはざるを自然と申すなり、これ即ち他力にてまします」と、微に入り細にわたつて懇切に教えられるのである。

自分の考えをもととした是非・善悪は、そらごとたわごとまことあることなしで、善いとなればうぬぼれ、悪いとなると愚痴になり、卑屈になる。そうした姿は仏智の鏡に照らされて初めて見えて来るのである。源信僧都は、観無量寿経に凡夫往生の内下品の所に「下品の三生あに我等が分に非ずや」と云われ、法然聖人は「下品最も要なり、頗る我等が分に相当せり」と云われている。そこに両聖共に自己を見出されて「極重悪人唯稱仏」とも「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともからに同じて……唯一向に念仏すべし」と信知せられている。

ここに慚愧させられるのは、すでに仏智の鏡に写し出されているのに、それが自己の正体であると気付かぬことである。これを無視する限り、自分を永遠に見失うて了う。

私はかつて手乗り文鳥を飼っていた時、小鳥の前に鏡を出すと、そこに写る自分の影をしきりに攻撃した。それは

させられる」と云われた。親鸞聖人の仰せの中に、随時随处に、私と一体化して下さるのを拝し、仏心をとどけて下さるのである。池山先生は「同座の聖人」と讃仰されている。ここまでおいでの教は多いが、ここまで来て下さる教は、減多にないものである。

久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおもひと池山先生は重病の御令息の病床にあつて、知らず／＼子に在るものが自分に用意しているのに気付かれて、そこに久遠の親心をわが身一人に感佩されたのである。



が大切である。然し自分を知らぬといふことは非常に困難である。唯一時的、部分的な自分の姿は見つかつても、三世にわたる自分の全体は自分で知らぬことが出来ぬ。

善導大師の名言、機法二種深信には、「自身は現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の縁あることなし」とある。しかもそれは法に照らされて見えて来ることであった。歎異抄二章に「いづれの行も及び難き身なればとて地獄は一定すみかぞかし」と聖人が仰言つたのもそれである。今は駄目でもいつかはよくなれよう、明日に夢をかけて、それをはてしなく追うのである。

又歎異抄三章に「他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」とあるのは、仏の本願のまことを聞いて成程自分は悪人であつたと知らされ、この者をたすけんがためのおまことであつたと頂くまが、正しく浄土に生れさせて頂ける道であると教えられるのである。そこは如来の御はからい一つで、自分のはからいは微塵もないのである。よくならねばいかぬでもなく、悪くてもよいでもない。よくなるうとしても、どうにもならぬ身を、たすけんがための本願を仰ぐばかりである。

歎異抄十三章に「さればよきこともあしきことも業報にさしまかせて、ひとへに本願をたのみまらすればこそ他力にては候へ」とあり、全十六章には「悪からんにつけて

もいよ／＼願力を仰ぎまゐらせば自然のことわりにて柔和忍辱の心も出でくべし。総て往生には賢きおもひを具せずしてただほれ／＼と弥陀の御恩の深重なること常におもひ出しまゐらすべし。しかれば念仏も申され候。これ自然なり、わがはからはざるを自然と申すなり、これ即ち他力にてまします」と、微に入り細にわたつて懇切に教えられるのである。

自分の考えをもととした是非・善悪は、そらごとたわごとまことあることなしで、善いとなればうぬほれ、悪いとなると愚痴になり、卑屈になる。そうした姿は仏智の鏡に照らされて初めて見えて来るのである。源信僧都は、観無量寿経に凡夫往生の内下品の所に「下品の三生あに我等が分に非ずや」と云われ、法然聖人は「下品最も要なり、頗る我等が分に相当せり」と云われている。そこに両聖共に、自己を見出されて「極重悪人唯稱仏」とも「一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともからに同じて……唯一向に念仏すべし」と信知せられている。

ここに慚愧させられるのは、すでに仏智の鏡に写し出されているのに、それが自己の正体であると気付かぬことである。これを無視する限り、自分を永遠に見失うて了う。

私はかつて手乗り文鳥を飼っていた時、小鳥の前に鏡を出すと、そこに写る自分の影に驚き、改竄した。それは

お前の影だよと知らせる方法もなかった。又鮎のいる川に鏡をおくと、自分の領域を侵す敵としてはげしく攻撃すると聞いた。仏典をひもとく時、善人の救われるところは他人事とし、悪人の救いのところを自分と思えと法然聖人が注意されているのも御親切な警告である。

源信僧都の歌にも
夜もすがら仏の道を求むれば、わが心にぞたづね入りぬる

とあるし、道元禪師も、「仏法を学ぶといふは自己を知ることとなり云々」と云われている。

「汝自身を知れ」とソクラテスは警告したが、ゲエテは「そのことの大切さは誰も知っているが、誰一人としてそれに従う者はない」と、その至難さを慚愧している。こゝに仏智の鏡の大切さがきびしく省みさせられる。

孔子は「孝は百行の本なり」と掲げているが、孝とは老と子が一体にとけた心である。親心子知らずであるが、知る力もないことをよく理解して絶えず注ぐ親心が、いつしか子にとどく時ひらける心である。そこに百行の本としての智慧の眼が開くのである。仏心のまこと同様に、煩惱具足の身には知る由もないが、如来の飽くまでもお見捨てのない善巧の大悲、釈迦彌陀二尊の慈悲の父母の御恩まことに謝し難いものがある。

白杵祖山老師が「如来の衆生化によって、衆生が如来化させられる」と云われた。親鸞聖人の仰せの中に、随時随処に、私と一体化して下さるのを拝し、仏心をとどけて下さるのである。池山先生は「同座の聖人」と讃仰されている。ここまでおいでの教は多いが、ここまで来て下さる教は、滅多にないものである。

久遠このかた子故の廻向、わたし一人をかたおもひと池山先生は重病の御令息の病床にあって、知らず／＼子に在るものが自分に用意しているのに気付かれて、そこに久遠の親心をわが身一人に感佩されたのである。



あ と が き

新しい年を迎え「歳旦を先ずおとずれし念仏哉」の池山先生の句と共に念仏させて頂いております。皆様の御元氣なれと祈念して歳旦のお挨拶とさせて頂きました。

近角先生は、遠ざかれは忘れ離れるとうとんじる世の常の鉄則に反して、滅度を示されて徳光いよ／＼輝く仏心を讃えて下さいました。

池山先生は、念仏の自動し自省を促し、やがて洗悟と自顕の働きを讃仰下さいました。かくて仏と人との名告りを頂き、仏に手を執られての白道の旅がはじまることです。

川畑先生は、池山先生の御著の出版を喜ばれてお寄稿下さいました。

西元先生は、御仏縁をたどられながら、法味を頒つて下さいました。ことに木村無相翁の一周忌を迎え、感深いものを頂きました、改めて御礼申し上げます。

岩崎先生は、無相師の御手紙を御紹介下さいました。又土井紀明師には収録された臨末法語をも頂きました。逝かれて今更に無相師の信徳の高さを仰がせて頂きました。

山本晋道師は、稀有な信者でありましたが、そのお歩みの一端を御紹介しました。私は或る件で勤務先きで腹を

立て、街に出ました時、盲啞学校の生徒が、互に目と口をもつて助け合つて行く姿に心うたれ、自分も欠点の多い身なのに、相手を責めている愚かさに、共是凡夫のみの太子の教が身にしみましたことも思出されました。然し山本師はウツ病のため急逝、身にもつ業のきびしさを身をもって教えて下さいました。

御 案 内

一月二十日(第三日曜)午後一時半、一道会例会をお隣りの鬼頭康彦様宅で開かせて頂きます。

二月は白内障の手術をして貰いますので休会いをします。

定 価	半年 八〇〇円(送 共)	印刷人	坂 部 光 雄
	一年 一六〇〇円(送 共)	発行所	名古屋南区駆上二丁目三九
編 集・発行人	花 田 正 夫	名古屋市南区駆上二丁目三九	慈 光 社
電 話	八二局七〇三七番	振替口座	名古屋 六二四七番
	愛知県西加茂郡三好町大字福谷	郵便番号	四 五 七